福井大学リポジトリ
UNIVERSITY OF FUKUI REPOSITORY

文庫本を読もう

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-30 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 膽吹, 覚 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10098/10944

ようこそ、本の世界へ（3）

文庫本を読もう

語学センター 准教授　膽吹（いぶき）　覚（さとる）

大学生になると専門書を読む機会が増える。しかし、専門書は高価で重厚な上装本であり、その多くが電子化されておらず、携帯には不便である。そこで人文科学系であれば、専門書と併せて文庫本を読むことを勧めたい。ただし、角川スニーカー文庫や電撃文庫でライトノベルばかりを読むのではなく、そこはやはりもう少し大人になって、文庫本を通して〈教養と学術〉に触れてもらいたい。もちろん、それは紙の本である必要はない。電子書籍で「文庫本」を読んでもいい。そもそも文庫本は携帯に便利であることと廉価であることを考慮して作られた判型であるから、電子書籍とは相性がいいのである。

（左が袖珍名著文庫、右が立川文庫。筆者架蔵本）

日本の文庫本の歴史は、明治36年（1903）に創刊された冨山房の袖珍名著文庫に始まると言われている。「袖珍」とは袖に入れて持ち運びが可能な小型本という意味である。袖珍名著文庫からは上田秋成『雨月物語』や『今昔物語集』といった日本古典文学が発行された。同44年（1911）、立川文庫が創刊され、『猿飛佐助』『霧隠才蔵』などの忍術物の講談筆記本が相次いで出版された。大正3年（1914）には新潮文庫が創刊され、『アナトオル情話集』やヘッベル『ユウディト』といった外国文学の翻訳が多く刊行された。

（左が岩波文庫、右がレクラム文庫。筆者架蔵本）

こうした流れを受けて、昭和2年（1927）に岩波書店から岩波文庫が創刊された。その記念すべき第1号は佐佐木信綱『新訓万葉集』であった。その巻末に附録された「読書子に寄す」には、岩波文庫がドイツの「レクラム文庫を範とし」、その判型や装丁のみならず、叢書として発行すべき書籍の選定も「古今東西に亘って文芸・哲学・社会科学・自然科学等種類の如何を問わず、苟も万人必読すべき真に古典的価値のある書」に限り、「携帯に便にして価格の低きを最主と」することが宣言されている。今日、一般的に「文庫」と言った場合、「普及を目的とし、小型（A6判）で携帯して読むのに便利な廉価本の叢書」（『広辞苑』第6版）を意味するが、それは岩波文庫に始まったといってよい。今日、文庫と称する角川文庫、新潮文庫、ちくま文庫、講談社文庫、集英社文庫、みな然りである。

その中に在って岩波文庫は「古今東西に亘って文芸・哲学・社会科学・自然科学等種類の如何を問わず、苟も万人必読すべき真に古典的価値のある書」に限ったことから、創刊当初から今日までいわゆる〈教養〉の代名詞でもある。

大学生の中には「そもそも読みたい本がない。本を読め、本を読めと親や教師は言うが、何を読めば良いかわからない」と言う人がいる。もしあなたがそうであるならば、岩波文庫から1冊を選ぶことを薦めたい。なぜならその1冊は「万人必読すべき真に古典的価値のある書」であるからである。岩波文庫はその帯の色によって、黄色（日本古典文学）、緑色（日本近現代文学）、赤色（外国文学）、青色（自然科学・人文科学）、白色（社会科学）に分類されている。この帯色による分類をたよりにあなたの1冊を探してもよい。

岩波書店とは違う意味で教養の香りがする出版社に筑摩書房がある。小説家や評論家の全集の刊行で知られる出版社である。その文庫はひらがなで、ちくま文庫という。創刊は昭和60年（1985）で、文庫としては後発に属する。ちくま文庫はその特徴を活かして『夏目漱石全集』全10冊、『芥川龍之介全集』全8冊、『太宰治全集』全10冊などの文学全集を文庫本で刊行している。今日、日本近現代の著名な作家の全集なら電子書籍でかなり格安で購入できるが、紙の本で廉価で揃えるならちくま文庫がよい。

教養系の最後に新潮社の新潮文庫を取り上げておこう。新潮文庫は岩波文庫と並ぶ文庫界の老舗である。外国文学の翻訳で定評のある文庫だが、大学生諸君には「新潮文庫の100冊」という宣伝文句の方が、馴染みがあるかもしれない。この宣伝は今では夏の季語といってもよいほど定着している。市民プールの帰り道、涼を求めて立ち寄った商店街の本屋。そのレジの前の平台に山のように並べられていた新潮文庫。「新潮文庫の100冊」は夏、そして君たちのような若者が似合う。是非この100冊から1冊を手に取ってもらいたい。

学術系の文庫は講談社学術文庫や角川ソフィア文庫、ちくま学芸文庫、岩波現代文庫などがある。本来、学術書はA5判の上装本として出版されることが多いが、刊行後にその評価が定まり、文庫本として普及することがある。言い換えれば、文庫本化された学術書は大学生が読むに値する古典的名著と判断してよいだろう。

野間省一は講談社学術文庫の刊行に当って、「これは、学術をポケットに入れることをモットーとして生まれた文庫である。（中略）その学術がポケットにはいる形で、万人のものになることは、生涯教育をうたう現代思想の理想である」と述べている。講談社学術文庫は〈学術〉とはいえ、文庫本であるから廉価である。つまり、上装本の専門書として出版された当時の価格の10分の1から5分の1の価格で購入できるのである。これを大学生が買わ（読ま）ないという選択肢はないだろう。

私の専門は日本書誌学（日本書籍文化史）であるが、学生の頃から宗教学や文化人類学に興味があり、今でもそうした学問については専門書と併せて講談社学術文庫、角川ソフィア文庫、ちくま学芸文庫などから多くの学恩を蒙っている。大学生諸君も大学で学ぶ専門科目以外に興味を抱いた分野があれば、文庫本を通してその分野の学術的な知識を得てもらいたい。

最後に、角川ソフィア文庫には「ビギナーズ・クラシックス」シリーズがあり、『源氏物語』や『奥の細道』といった日本の古典文学をはじめ、『論語』や李白の詩といった中国の古典文学が収録（抄録）されており、中学生や高校生が古文・漢文に親しむには良好の入門書である。また講談社学術文庫や角川ソフィア文庫には、古典文学の現代語訳シリーズもある。こうした現代語訳本は教員になった時に手もとにあれば重宝するであろう。いずれも文庫本であるから廉価で携帯に便利であり、教育学部の学生にはお勧めの文庫本である。